

鎌倉における明応年間の「津波」について

鎌倉国宝館* 浪川 幹夫

Tsunamis of the Meio Period (1492-1501) in Kamakura, Kanagawa Prefecture, South-Central Japan

Mikio NAMIKAWA

Kamakura Museum, 2-1-1 Yukinoshita, Kamakura, Kanagawa 248-0005, Japan

A tsunami arrived at Kamakura, Kanagawa prefecture, south central of Japan, in year 5 of Meio period (A.D. 1495) inferred from a historical document of “Kamakura Ohnikki”, which is a chronological table recorded in medieval times. The description indicates that there was a tsunami along the Yuigahama coast in Kamakura, and went up to “Sendodan”, which is considered to be a road approaching Tsurugaoka Hachimangu shrine. The description also indicates that the tsunami destroyed buildings around Great Buddha. This study identified the possible location of “Sendodan” from the other document “Zenpoji Tera Chizu”, which is an old map around Zenpoji, and also pointed out that the precinct of Great Buddha might be located closer to the coast. These identifications mean that the tsunami inundation area in Kamakura was narrower than that estimated by previous studies.

Keywords: Kamakura Ohnikki, Meio Period, Tsunami, Earthquake.

§ 1. はじめに

明応年間の津波については、明応四年(1495)に発生したものと明応七年(1498)に発生したものの2つが知られている。鎌倉に襲来したのは同四年とされ、増補続史料大成刊行会(1979)所収『鎌倉大日記』(筆者及び制作年代未詳)の同年八月十五日(ユリウス暦1495.9.3)に、

四^{乙卯}八月十五日大地震洪水、鎌倉由比浜海水到千度檀、水勢大仏殿破堂舎屋、溺死人二百余、

「(明応)四^{乙卯}卯(の年)八月十五日大地震洪水、鎌倉由比浜の海水千度檀に到る。水勢大仏殿の堂・舎屋を破る。溺死人二百余」と書かれている。

しかし、この津波は存在が疑われており、紀伊半島から房総半島までの沿岸部に被害を及ぼしたとする同七年のものが重視されている[震災予防調査会(1904);宇佐美(1998)]. 殊に、山本(1989)は鎌倉での津波襲来について論じるにあたり同七年説を採用し、都司(1980)は『鎌倉大日記』の記述について、同書の筆者が原典から年月日を誤って転記した可能性が高いとしている。

ところで、近年この時期の津波に関して注目を集めている研究に、金子浩之氏の論攷がある。氏は静岡県伊東市宇佐美遺跡の発掘調査の成果から津波堆積層について検討し、層位の状態及び遺物の出土状況などより同層が存在するとして、この土層を出土

遺物の年代で 15 世紀末に比定した。そして、「明応の津波の前後には、およそ六十から百年の間、宇佐美地区に津波があった形跡は見られないし、一方で、出土陶磁器片から得た十五世紀末という年代観がズレることは考えにくい」とし、この土層を『鎌倉大日記』の記事から明応年間の地震津波のものと推定している[金子(2012)].

このことを踏まえて金子(2012)は、後述する『鎌倉大日記』の「千度檀」の記から「このため、『鎌倉大日記』の右記の文言は大雑把に言って標高七メートル前後を計る現在の二ノ鳥居を過ぎて鶴ヶ丘八幡宮の社頭(横大路の現標高は約一〇m)近くにまで津波が到達し、『溺死者二百余』という被害を出したと記しており、鎌倉の沖積低地の大半は被災したと理解できる」とし(図1)、同書にある「大仏殿」についても「既に無かったものの関連する坊舎や諸堂が流亡した可能性は高い」とした。さらに、鎌倉市(1979a)が明応六年『善法寺寺領書上』の記述を丈尺制から坪単位制への移行と推定したことに注目し、「明応四年津波で都市が破壊され、二年後ようやく住民が戻り、再び土地を区画する必要が生じたのだと解される」と、この史料を同四年鎌倉に存在したとされる津波襲来に関連付けている。

鎌倉時代政權都市であった鎌倉には、建久六年(1195)以降『吾妻鏡』や『親玄僧都記』などに地震の記録がある。ところが、鎌倉の記録は幕府滅亡以後

* 〒248-0005 神奈川県鎌倉市雪ノ下 2-1-1 [鶴岡八幡宮境内]
電子メール: medai@city.kamakura.kanagawa.jp

時代が下がるとともに希薄となる[金子(2012);浪川(2013)]. 室町時代以降の史料が乏しい時期の歴史地震研究について、金子(2012)が「こうした文献史料の限界性から文献以外の史料によって歴史津波の存在を追跡する研究例が増えている」と指摘しているとおりに、地震や津波の痕跡を調査することにより地震史料の裏付けを取る努力がなされていることも事実である。ただ、地震の存在確認やその裏付けなどのために『鎌倉大日記』や『王代記』など年代記を利用する際、矢田(2012)は「年代記はその史料の性格を明確にすることなしに利用するのは危険である」とし、とくに「年代記に記された記事のなかでも、その年代記が記された時期よりもはるか以前の記事を地震史料として使用する時は、相当慎重に取り扱わねばならないのである」と指摘している。

明応年間で、鎌倉に來たとされる津波は何時の地震によるものであろうか。また、金子(2012)がいう程の津波が襲来し「鎌倉の沖積低地の大半は被災した」とする状況がはたして現出されたのであろうか。そこで、本稿では『鎌倉大日記』同四年の記事を再度確認し、その上で当時鎌倉を襲ったとされる津波について、「若宮大路」や「大仏殿」のほかこの時期の鎌倉の町(町屋)の状況から検証することとした。

なお、引用した史料の読み下しは、とくに断りがない限り筆者が行った。

§ 2. 明応年間の地震と津波

2.1 明応四年の地震記録

『鎌倉大日記』同年八月十五日の記事のほかには、続群書類従完成会(1933)所収『御湯殿の上の日記』に

(同年八月)
十五日。(中略)地しんゆる

「十五日。(中略)地震揺る」、また、陽明文庫(1991)所収『後法興院記』に

十五日^{乙丑}晴○ 酉剋地震、

「十五日乙丑晴○ 酉の剋(午後6時頃)地震」とある。『御湯殿の上の日記』は天皇近侍の女官達による職掌日記で(1477~1826 が伝存)、『後法興院記』は室町時代後期の関白・太政大臣近衛政家(1444~1505)の日記である。これら京都に遺る記録からすると、同日の地震の存在は確かである。

2.2 明応七年の「地震」記録

同年は、八月二十五日(ユリウス暦 1498.9.11)に地震があったという。当時の津波については『勝山記』に記事がある[山梨県(2001)]。同書は甲斐国で書き継がれた年代記といい、これには

明応七^{戊午} 閏月十月ナリ、(中略)八月廿五日辰剋^二大地震動^{シテ}、日本国中堂塔乃至諸家悉^レ類^レ落、大海辺^リ皆々打浪^ニ引^レテ伊豆^ノ浦

へ悉^ク死失、又小河悉損失^ス

「明応七^{つちのえうま} 戊午 閏月十月なり。(中略)八月廿五日辰^剋に大地震動して、日本国中堂塔ないし諸家^悉く類^レ落つ。大海辺りは皆々打ち浪に引かれて伊豆の浦へ悉く死し失す。小河悉く損失す」と記されている。

そして、同国ではこのほかに『王代記』があつて[清水・服部(1967)],

(明応七年)
同八月廿五日大震動、堂塔クツレ築地損、堀ウマリ山崩テ大地人埋ル、

「(明応七年)同八月廿五日大震動、堂塔くずれ築地を損じ、堀うまり山崩れて大地に人埋る」と、地震及び被害の状況を伝えている。同書は現山梨市窪八幡宮の別当であつた「上之坊普賢寺」に伝わつた年代記である。この記事は、当地での様子を示したものであろうか。

この地震は京都や奈良を含む東南海から東海にかけて影響を及ぼしたようで、陽明文庫(1991)所収の『後法興院記』は「去六月十一日地震一倍事也」と同年六月十一日の地震の「一倍」であつたと記した後、同年九月二十五日条で

伝聞、去月大地震之日、伊勢 参河 駿河 伊豆大浪打寄、海辺二三十町之民屋悉溺水、数千人没命、其外牛馬類不知其数^{云々}、前代未聞事也

「伝え聞く。去月大地震の日、伊勢、参河、駿河、伊豆に大浪打ち寄せ、海辺二・三十町の民屋^悉く水に溺る、数千人の命を没し、そのほか牛馬類その数を知らずと云々。前代未聞の事なり」とし、伊勢から伊豆まで大津波が襲来したことを伝えている。

実際、京都にはこの日の記録が多く遺されている。続群書類従完成会(1933)所収『御湯殿の上の日記』の同年八月二十五日条に

廿五日。けさちしんけう／＼しうゆる。

「(八月)廿五日。今朝地震。稀有稀有しう揺る(きわめて稀な揺れである)のほか、続群書類従完成会(2000)所収『実隆公記』には

八月小(中略)廿五日^{己丑} 早朝地震大動、五十年以来無如此事、^{云々}

「八月小(中略)廿五日^{己丑} 早朝地震大いに動く。五十年以来かくのごとき事無しと、云々」と、大きな揺れを体験したことが書かれている。そのうえ、^{ひがしぼうじょうかすなが}東坊城和長(1460~1530)の日記『和長卿記』に

(巳)
明応七年戊午(中略)八月小(中略)廿五日巳丑晴、辰刻有大地震、予生前無如此儀、諸人恐怖、占文又以外也、水神動、^{云々} [東京大学史料編纂所(謄写本)],

「明応七年戊午(中略)八月小(中略)廿五日己丑晴、

辰の刻(午前8時頃)大地震あり。予の生前かくのごとき儀無く、諸人恐れかなしむ、^(意)古文(古いに現れた文言や、古いの結果)また以外なり、水神動くと、云々とあるほか、^(意)甘露寺親長(1424～1500)の日記『親長卿記』に

明応七年愚記(中略)八月(中略)廿五日晴、已剋許大地震以外事也[増補史料大成刊行会(1963)],

「明応七年愚記(中略)八月(中略)廿五日晴、已の剋(午前10時頃)ばかり大地震、^(意)以外の事なり」と記されている。この地震は被害が甚大であったようで、これらの史料から人々が畏れ慄いた姿が感じられる。

同年の地震史料は、東海地方以西のものが圧倒的に多い。関東地方についてはほとんど見られず、わずかに『千葉懸安房郡誌』が知られているのみである[千葉県安房郡教育会(1926)]。同誌を見ると、

○明応七年戊午八月二十三日近畿関東諸国の地大に震ひ、房総の地殊に甚だし。時に長狭郡の沿岸大海嘯起り地盤陥落し、人畜共に没し、小湊誕生寺為めに破潰す(「内浦絵図面」)。

と書かれている(原文ママ)。さらに「四三、湊村」の項では、

本村の沿革を按ずるに、誕生寺旧記に曰く、内浦は総称にして岡村・市川村・小湊村に分ると。蓮華潭にありし誕生寺陥没し、市川村の大半海となる。(中略)元禄十六年十一月^(ママ)二十二日海嘯あり。人家流失死傷多し。海岸欠損し海となる。

とあって(原文ママ)、誕生寺と同寺が所在する湊村の明応七年と元禄十六年の津波のことを伝えている。ただ、「八月二十三日」と日付に齟齬があり、同誌が典拠とした『内浦絵図面』と『誕生寺旧記』は原典が示されていないので、記事の根拠は判らない。

明応七年八月二十五日における房総半島方面の地震と津波については未詳である。そして、本州東部で津波が到達したとされるのは『勝山記』『後法興院記』等の記事に見える三河・駿河・伊豆地方であり、鎌倉方面に達したとする史料は今のところ見当たらない。

明応年間同四年及び同七年に地震(あるいは、有感地震)があったことは史料から窺える。ただし、鎌倉での津波襲来を伝えたものは、『鎌倉大日記』同四年の津波記事のみかも知れない。

§3 『鎌倉大日記』の津波記事について

3.1 「海水到千度檀」のこと

『鎌倉大日記』明応四年の記事には「鎌倉由比浜海水到千度檀」と書かれている。このうち「千度檀」の

「千度」は「^{せんどこうじ}千度小路」で、「檀」は「^{だんかつら}段葛」とする推定がなされている。「千度小路」は現在の若宮大路(海岸から鶴岡八幡宮につづく直線的な鎌倉の中心道路;図1)のことだろうか[市木(1993)・白井(1963)]。そして、「段葛」とは若宮大路沿いに二の鳥居から鶴岡八幡宮までつづく、葛石を積んだ車道より一段高い同宮参詣路のことである。

『吾妻鏡』文治五年(1189)八月十日条に

今日於鎌倉、御台所以御所中女房数輩、有鶴岳^(註)百度詣、是奥州追罰御祈精也(下線は筆者)

と、北条政子が奥州討伐祈願のため御所の女房数名を連れて鶴岡八幡宮へ百度詣を行ったことが書かれ、このほかは『梅花無尽蔵』文明十八年(1486)の記事に

透^(註)千度小路。謁^(註)鶴岡之八幡宮。(中略)千度壇連^(註)七里浜。

「千度小路をとおり、鶴岡の八幡宮に謁す。(中略)千度壇七里浜に連なる」とある[市木(1993)]。また、同大路は「七度行路」などとも称されたようで、鶴岡八幡宮相承院の供僧快元(1487～?)の同宮造営記『快元僧都記』^(註)統群書類従完成会(1983)の天文三年(1534)六月十六日条に

一七度行路。近年磨滅。(中略)鶴岳八幡宮七度行路^(註)下馬橋二ヶ所欲^(註)修治^(註)勸進之状。

「一、七度行路、近年磨滅す。(中略)鶴岳八幡宮七度行路ならびに下馬橋二ヶ所^(註)修治するを欲^(註)勸進之状」と記されている。『梅花無尽蔵』にある「千度小路」と「千度檀」の表記の違いについては不明だが、『鎌倉大日記』の「千度檀」は千度・百度・七度の参詣に由来することが想像できる。

若宮大路については、昭和三十七年(1962)1月に行われた下水道工事により現地表下約1mに鎌倉時代の遺構面が認められ(当時の道路面か。現在の海拔は二ノ鳥居前で6.0mである)[白井(1963)]、市立体育館前(由比ガ浜二丁目11番先;図1)で実施された発掘調査で推定中世路面が海拔約4m～6mの高さで確認されている[鎌倉市教育委員会(2000)]。

金子(2012)は『鎌倉大日記』の「海水到千度檀」の記から、明応四年の津波によって「鎌倉の沖積低地の大半は被災したと理解できる」とした。しかし、後述の『^(註)善法寺分年貢注文』と同じ明応頃と推定される相模原市津久井町光明寺蔵『善宝寺寺地図』には「善宝寺之地」「善宝寺之内」等の書込みがあるほか、若宮大路に「^(註)置石」と記されている。この「置石」は段葛のことで、さらに滑川に架かる橋の「南」に「^(註)米町」と書かれた町屋と思える建物群が描かれている。そのためこの橋は現在の下馬四ッ角付近にある延命寺橋と推定され、この橋の近くまで「置石」とあるから明応頃

の段葛は下馬四ッ角近くまでであった可能性が考えられる(図2)。

山本(1989)も指摘していることであるが、現在の段葛は鶴岡八幡宮から二ノ鳥居迄であるのに対して、この絵図からは明応年間には二ノ鳥居よりもさらに南の下馬四ッ角まで延びていたことが推定される。そのため、同四年の津波が浸水したのは段葛南端の下馬四ッ角から社頭(鶴岡八幡宮の入り口)までのかなり広い範囲内のどこか、ということになり、金子(2012)のいう「鎌倉の沖積低地の大半は被災した」津波かどうかは判らない。そして、『鎌倉大日記』は「海水」が「千度壇」に「到」ったと書いているので、たとえ大路まで達したとしても推定遡上高は工事立会調査や発掘調査で得た地点それぞれの中世遺構面(中世路面)の海拔高程度だったのではないだろうか。以上から、同四年の津波は金子(2012)が示した様な大規模なものではなかったと思われる。なお、善宝寺の地は図1に照らすと、現在の鎌倉市大町・教恩寺辺りと推定できる[三浦(1993)]。

一方、山本(1989)は鎌倉における明応地震の津波に関連し、この時期の当地の状況について「最近の歴史考古学の調査・研究によれば、鎌倉時代の若宮大路は、両側を土手に囲まれた窪地状の道路で、幅は五〇～六〇メートルあったが、繁栄期を過ぎると人々が通行できたのは真中の段葛の部分で、あとは湿地帯か草地であったという。(中略)そして、若宮大路の南端である下馬四ッ辻から南は、町屋でなく荒地であり、浜であった。この浜の部分で鎌倉時代には合戦が行なわれ、刑場にもなり、武技の競争も行なわれた。下馬四ッ辻の西を由比浜通りと称し、南から海岸線までは道はなかったのである」とした。その上で、『吾妻鏡』建長四年(1252)四月一日の記のほか、明治十五年(1882)の陸地測量図等を参考にして、中世の鎌倉の町では「下馬四ッ辻以南を通行していない」と記している。そして、『善宝寺寺地図』及び『善法寺分年貢注文』に関して、山本(1989)は「そのうちの若宮大路から東側、米町は鎌倉期の繁華街であった。(中略)明応六年、すなわち地震の前年でも、青物屋・紙屋・銀細工・職人などが住み、米町では穀物の売買をしていたらしいことなどから、(中略)米町近辺は、鎌倉内の商業地区を構成していたと考えられる」と、この時期の米町を商業地として捉えてもいる。しかし、鎌倉に襲来した津波を明応七年のものとしたうえで、「したがって、津波が、千度壇(原文は「壇」)にいたったとすれば、米町はその範囲に含まれ、相当な被害があったとかがえられるのである」と、『善宝寺寺地図』に描かれた町並みが、この時の津波によって失われたのではと推論している。

ところで、若宮大路での埋蔵文化財調査は、白井(1963)や鎌倉市教育委員会(2000)の報告例以外にも、

昭和六十二年(1987)～平成五年(1993)と平成九年(1997)に実施されている。その結果、現在の JR ガード～一ノ鳥居付近、一ノ鳥居と海岸橋交差点の間で中世の遺構が確認されている[鎌倉市教育委員会(2006)]。また、近年では同大路沿いの簡易裁判所北側(若宮ハイツ建設用地・由比ガ浜二丁目 1034 番1)のほか、同大路南西方面の海浜部(同四丁目 1136 番)と鎌倉海浜公園(同四丁目 1101 番2)でも発掘調査が行われ、膨大な数の人骨とともに鎌倉時代以降戦国時代に至る中世びとの痕跡が発見されている(図1)[齋木(1994);由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団(1997);由比ガ浜南遺跡発掘調査団(2002)]。近年実施された埋蔵文化財調査の成果等からすれば、鎌倉時代から戦国時代にかけての若宮大路一帯は、山本(1989)がいう「湿地帯もしくは草地であった若宮大路は、大雨が降り続けると洪水になってしまうところであった」という状態であったとは思われない。

3.2 「鎌倉大仏」と「大仏殿」のこと

「鎌倉大仏」は「国宝銅造阿弥陀如来坐像」といい、像高 11.39 m、重量約 122 t に及ぶ銅仏である。現在は、若宮大路の西方、海岸(由比ヶ浜)から内陸に約 880 m の位置にあり、その標高は約 14 m である(図1)。尊像や「大仏殿」については『吾妻鏡』嘉禎四年(1238)三月二十三日条に

今日相模国深沢里大仏堂事始也、僧浄光令勸進尊卑緇素企此営作(云云)、

「今日相模の国深沢の里の大仏堂とその事始なり。僧浄光勸進せしむ尊卑の緇素(僧俗)、此の営作を企つと(云云)」とあるのが最初であり、同年五月十八日条に十八日△壬辰△相模国深沢里大仏御頭、奉拳之、周八丈也、

「十八日△壬辰△相模の国深沢の里の大仏みぐしの御頭、これを挙げ奉る。周まわり八丈なり」の後、「大仏殿」の造営があったとみえ、仁治二年(1241)三月二十七日条に

廿七日△乙卯△又深沢大仏殿、同有上棟之儀(云云)

「二十七日△乙卯△(中略)また深沢の大仏殿、同じく上棟の儀ありと(云云)」とあって、この日「立柱上棟」されたという。そして、同年四月二十九日条に

廿九日△丁未△囚人逐電事、預人罪科、不軽召過怠料、可被寄進新大仏殿造営之由、為清左衛門尉満定奉行、今日有議定、

「二十九日△丁未△囚人逐電の事、預人の罪科、軽からず。過怠料を召し、新大仏殿の造営に寄進せらるべきの由、清左衛門尉満定(清原)を奉行として、今日議定あり」、寛元元年(1243)六月十六日条に

十六日△辛酉△未尅、小雨雷電深沢村、建立一字精舎、安八丈余阿弥陀像、今日展供養、

導師、卿僧正良信讚衆十人、勸進聖人淨光房、此六年之間、勸進都鄙卑尊莫不奉加、
「十六日△辛酉△未の剋、小雨雷電す。深沢村に、一字の精舎を建立し、八丈余の阿弥陀の像を安じ、今日供養を展ぶ。導師は、卿の僧正良信。讚衆十人。勸進聖人淨光房、この六年の間、都鄙を勸進す。卑尊奉加せずといふこと莫し」とあって、寛元元年に開眼供養が行われ、尊像及び「深沢里大仏堂」の造営は「僧淨光」の勸進によるものであったと知ることが出来る[国文学研究資料館(2014)]。また、「大仏殿」造営にあたり「清左衛門尉満定」なる者が造営奉行に補されたほか、囚人を逐電させた「過怠料」が寄進されたとしているので、幕府の関与も想像される。

ただ、『東関紀行』(作者未詳)によると、これを書いた人物は仁治三年(1242)完成前の大仏殿を訪れ、
過ぎにし延応の比より、関東の高き賤しきを勧めて、仏像をつくり堂舎をたてたり。その功すでに三が二にをよぶ。(中略)仏は則両三年の功すみやかに成り、堂は又十二楼のかまへたちまちに高し。彼東大寺の本尊は、聖武天皇の製作、金銅十丈余の盧舎那仏なり。(中略)此阿弥陀は八丈のたけなれば、彼大仏のなかばよりすゝめり。金銅木像のかはりめこそあれども、末代にとりては、是も不思議といひつべし(原文ママ)。

と、当時尊像と「大仏殿」が3分の2ほど完成したが、像は阿弥陀如来で木造であったと伝えている[佐竹(1990)]。さらに、『吾妻鏡』建長四年(1252)八月十七日条に

今日当彼岸第七日深沢里、奉鑄始金銅八丈釈迦如来像、
「今日は彼岸第七日に当れり。深沢の里に、金銅にて八丈の釈迦如来の像を鑄始め奉る」とあって、同年「八丈釈迦如来像」が鑄始められている[国文学研究資料館(2014)]。この点からすると、木造大仏と銅像との関係や、「釈迦如来」と記された金銅尊像の覆堂「大仏殿」の創建時期は不明となる[鎌倉市教育委員会(1986);高徳院(1961)]。このほかは、『金沢文庫文書』元徳元年(1329)「金沢貞顕書状」に

関東大仏造営料唐船事、明春可渡宋候之間、大勸進名越善光寺長老御使道妙房、年内可上洛候、
「関東大仏造営料唐船の事、明春渡宋すべく候の間、大勸進名越善光寺長老の御使の道妙房、年内に上洛すべく候」と、「関東大仏」の再建か修理に関することが伝えられている[神奈川県立金沢文庫(2002)]。

そのうえ、文明十八年(1486)に江戸及び鎌倉に遊んだ京都相国寺の僧万里集九(1428～?)は、自著『梅花無尽蔵』に自身が同年十月二十四日当地を訪れた折のこととして、

文明龍集丙午。十有八年小春廿三日乙未。
(中略)逢銅大仏。々長七八丈。腸中空洞。応容数百人。(中略)僉云。此中往々博奕者白昼呼五白之处也。無堂宇。而露坐突兀。

と、高さ7、8丈(約24 m。実際の像高は約11.39 m〔台座を含めた現在高は13.35 m〕)の銅造大仏に出会い、数百人も入れそうな胎内にわらじをぬいで入ったこと、現地の人々の談としてこの中で昼間から賭場が開かれ「五白が出る」などと声が響いているとした後で、堂(大仏殿)はなく尊像は露坐であったと記している[市木(1993)]。従前から知られていることではあるが、明応四年の9年前には「大仏殿」はなかったことが窺える。

「大仏殿」倒壊を物語る記事としては、『太平記』(西源院本)の「一相模次郎時行滅亡事」道誉拔懸破敵陣并渡相模川事(中略)左馬頭直義ト尊氏卿ノ勢并ラレテ、五万余騎、矢矧宿より取ツ帰テ、又鎌倉へ発向ス、相模次郎時行聞之、源氏ハ若干ノ大勢也ト聞ヘケレハ、待軍シテ敵ニ氣ヲ吞レナハ叶マシ、先スル時ハ人ヲ制スルニ利アリトテ、我身ハ鎌倉ニ有ナカラ、名越式部大夫ヲ大将トシテ、東海東山両道ヲ押テ責上ラル、其勢三万余騎、八月三日巳ニ鎌倉ヲ立タントシケル夜、俄ニ大風吹テ、家々ヲ吹破リケル間、天災ヲ遁ムト、其辺近ク宿リケル軍勢共五百余人、大仏殿ノ中へ逃入テ、身ヲ縮メテ居タリケルニ、大仏殿ノ棟木、梁、微塵ニ折レテ倒レケル間、内ニツマリ居タル兵共五百余人一人モ不殘ヲシニウテ、死ニケリ(原文ママ)と、『神明鏡』建武二年(1335)八月三日条「大風吹家々ヲ破ケル間。為方無テ軍勢五百余人大仏殿ニ逃入テ居タリケル。大仏殿虹梁棟柱微塵ニ折レテ倒ケル間。有ケル者五百余人一人モ残ラス打殺レケリ(原文ママ)」が知られている[鷲尾(1936)];続群書類従完成会(1989)]。また、『鎌倉九代後記』と『鎌倉大日記』の正平二十四年・応安二年(1369)条「九月三日大風、鎌倉大仏殿顛倒」(原文ママ。文面同一)も存在する。ただし、南北朝時代のこの記事以降、鎌倉大仏に関する史料は江戸時代初期まで存在しない。詳細は不明だが、中世における鎌倉大仏の史料は、正平二十四年の記事が最後かも知れない[黒川(1914);増補続史料大成刊行会(1979)]。

以上、中世で「鎌倉大仏」と「大仏殿」の記録は、『吾妻鏡』『東関紀行』『金沢文庫文書』のほかは『太平記』や『鎌倉大日記』などに散見されるのみである。そして、造営に際しても鎌倉幕府の関与が想定できるものの、何時、誰が、何の目的で造らせ、どのような変遷を辿ったかは未詳である。

3.3 「水勢大仏殿破堂舎屋」のこと

鎌倉市は、尊像の制作方法と「大仏殿」の存在確

認のため、高德院境内(図1)で平成十二・十三年度に発掘調査を実施した。その際、同建物の礎石を据えた「根固め」遺構が発見され、建物の規模が桁行145尺(約44m)・梁行140尺(約42.5m)で、礎石の「根固め」遺構の最高点が海拔13.3mであったことが明らかとなった[鎌倉市(2001, 2002)]。

ところが、「大仏殿」及び「鎌倉大仏」は、

- ①弘安七年(1284)極楽寺開山忍性が、永福寺や「五大堂」のほか「大仏別当」に「補任」されたこと(『性公大徳譜』[田中(1973)]、
- ②文永五年(1268)十月十一日に日蓮(1222～1282)が「大仏殿」「大仏殿長老」「大仏殿別当御房」に書状を出したとされること(『日蓮書状』の「与北条時宗書」「与建長寺道隆書」「与大仏殿別当書」等[『本満寺本』トアリ]・『日蓮聖人註画讃』卷二)[身延久遠寺(1976);続群書類従完成会(1988)]、
- ③報恩寺(今は廃寺)の開山で、瑞泉寺と黄梅院に住した禅僧義堂周信(1325～1388)が詩に

宿^ス相之大仏寺^ニ 義堂
早歳曾^テ遊^テ頻^{ナリ}甲子^ニ。羞^{ラクハ}将^テ髮^ノ白キヨ^ク
對^{スルヲ}山^ノ蒼^{キニ}。寺瀨^{シテ}海岸吹^テ松^ヲ激^シ。
潮退^テ灘沙送^{ルコト}月^ヲ長^シ。去雁亡^シ書家万里。
寒砧牽^ク夢^ヲ楚三霜。客懷蕭颯^ク秋風^ノ晚。憐^ム
爾^チ園蓀小^{シク}吐^ク芳^ヲ。(『新編鎌倉志』卷5
「○大仏^{附切通}」所収)[白石(2003)]

「相の大仏寺に宿す 義堂

早歳(若い歳)曾^テ遊^ビて甲子(の日〔吉日])頻^シなり。羞^ハらくは髮の白きを將^テて山の蒼^ききに対するを。寺瀨^シて海岸松を吹^キて激^シ。潮退^テて灘沙月を送ること長^シ。去雁(春)書^ク亡^シ家万里。寒砧^ノ夢を牽^ク楚三霜。客懷蕭颯^クたり(ものさびしく風が吹く)秋風の晚。憐^ムむ爾^チ園の蓀(あやめ)小^{シク}く芳^ヲを吐^クを」と、若年の頃「相之大仏寺」に宿したと書いていること、

- ④『三嶋神社文書』の応永四年(1397)九月九日「伊豆守護代(寺尾憲清)奉書」に「大仏寺雑掌」、同社文書の同五年閏四月二十八日「鎌倉公方(足利氏満)御教書」に「鎌倉大仏寺」と記されていること[神奈川県立金沢文庫(2002);高橋(1996)]、

から、中世のある時期寺院として「大仏殿」「相之大仏寺」「鎌倉大仏寺」などと称されていた可能性が考えられる。そこで、『鎌倉大日記』の「水勢大仏殿破堂舎屋」を素直に読むと「水勢大仏殿の堂・舎屋を破る」となるので、尊像に付属する境内の建物が流されたたと解釈するのが自然である。

「大仏殿」境内については、田中(1973)の「大仏別当」や身延久遠寺(1988)などの「大仏殿」「大仏殿長老」「大仏殿別当御房」からすると、極楽寺(図1)との関係も想像できる。大仏殿の境内が極楽寺方面まで広

がりをもっていたのだろうか。ただ、同寺と鎌倉大仏との結びつきがどれほど密接で、「大仏殿」境内の範囲や諸堂宇の配置がどのような状態であったかは依然判明していない。しかし、義堂の詩では「相之大仏寺」が「寺瀨^{シテ}海岸吹^テ松^ヲ激^シ」と言っており、この語によって「相之大仏寺」(「大仏殿」)の境内は、師が鎌倉に住した延文四年(1358)から康暦元年(1379)の頃に、海岸近くまであったと解釈できるかも知れない。

金子(2012)は、「大仏殿」は「既に無かったものに関連する坊舎や諸堂が流亡した可能性は高い」としながら、現高德院境内の「山門付近にまで津波が到達した可能性は高く」と述べている。しかし、「水勢大仏殿破堂舎屋」は極楽寺忍性の「大仏別当」補任記事や境内名称と思える「相之大仏寺」「鎌倉大仏寺」等の記、義堂の詩などからすると当時の境内範囲が海岸に近かった可能性があるため、「山門付近にまで津波が到達した可能性は高く」としたことについては、無理があると考えたい。

さらに、これとは別に山本(1989)は、「この『大仏殿』を、大仏を覆う建物のことではなく、高德院を指すと解釈することは可能である。露坐の大仏のほか、無住ではあるが、老朽化した庫裡や山門などの付属建物が存在しており、それらが津波ではなく、地震によって破壊されたと考えれば、この記事は、文章に関する限り、それほどおかしいものではない」とした。『鎌倉大日記』の「大仏」の「付属建物」倒壊に関する記述は津波による被害を伝えたのではなく、地震によるものであったと推論している。しかし、同書の「水勢大仏殿破堂舎屋」を素直に読むと、この語は地震被害を表したものは思えない。

ちなみに、「高德院」の名称はこの時期には見られない。そして、当時の鎌倉方面において、地震被害のみを伝えた史料は、今のところ存在しない。

3.4 明応年間の鎌倉の姿

『梅花無尽蔵』文明十八年(1486)十月二十四日の記で、万里集九は「銅大仏」を尋ねたあと寿福寺ではひとりの僧にも逢わなかったとし、同二十九日荏柄天神社に参詣した際も梁の上に兵燹の痕跡があったなどとも書いているので、この頃鎌倉は衰退していたことが想像できる[市木(1993)]。ただ、鶴岡八幡宮については、門や回廊などは昔の姿が失われず「由井浜」の鳥居もきらびやかであったとも記している。当時、同宮のみは荘厳を保っていたのかも知れない。

室町時代における文明十八年以前の鎌倉は、第五代鎌倉公方の足利成氏(1434?～1497)が康正元年(1455)六月の今川範忠(1408～1461?)の攻撃を受け、古河に逃れたため衰微したとされている。その後は一時関東管領上杉房頭(1435～1466・山内上杉家当主)の支配となったが、その養子顕定(1454～1510)

が文明九年(1477)に上野国那波莊(群馬県伊勢崎市)に去って以降「無主の地」となったという。永正九年(1512)頃とされる伊勢盛時(北条早雲〔1432～1519〕)による鎌倉支配までだろうか[鎌倉市(1979a)].

ところで、金子(2012)は明応六年(1497)『善法寺寺領書上』に関する鎌倉市(1979a)の記述を基に、鎌倉の町の衰退の原因を同四年の津波にあるとした。「土地の面積積算の単位として京と同じ丈尺の単位が使用されてきた都市鎌倉において、明応六年以降は、その中心域であっても『在家』の単位としての『坪』が用いられていることを指摘した。この変化は、鎌倉の衰微が明応六年までに極まったことを示す象徴的な出来事であるものとみられる」とした上で、『梅花無尽蔵』の鶴岡八幡宮の記述との矛盾点を「為政者の存否とは別の理由」があるとして、鎌倉の衰退は「いみじくも前述の『善法寺寺領書上』に、明応六年に鎌倉の中心部で田舎と同じ坪の制が行われたと確定されるのであるから、そこに至った直接的な原因は、明応四年津波による被災と荒廃が主因であったと想定すべきではないだろうか」と記している。

しかし、鎌倉市(1979a)にも掲載されている津久井町光明寺蔵の明応六年(1497)七月二十五日付『善法寺分年貢注文』を見ると、「善法寺分」として「二百十坪寺之給 八百四十文 年貢 米町浄本」^(宝)「百四十坪米町青物屋 三郎次郎」^(宝)「百十九坪 四百七十六文 源三郎」^(宝)などと書かれていて、当時の善宝寺寺地の広さ「合千八百四十五坪」や年貢の額「年貢夏秋共ニ 都合七貫三百八十文」等のほか、作人についても知ることができる。そして、同書の作人の記には「米町」「中座」「辻子」「塗子か辻子」などの地名、「青物屋」「紙屋」「銀細工」「塗し」^(師)などの職業が付記されている[神奈川県(1979)].

光明寺は、建久年間(1190～98)退耕行勇が創建した桐谷宝積寺と称する台密禅兼学の道場で、文永年間(1264～74)以降禅宗寺院となったという。本文書の所在から、光明寺(桐谷宝積寺)と善宝寺との本寺・末寺としての関係が窺える。そのうえ鎌倉市(1979a)は、『善宝寺寺地図』(図2)に「米町」とした部分に町屋と思える建物群が描かれていることを参考に「特に注意すべきは中座の文字である。中座というのは町座のことであったらしい。すなわち里座に対して呼ばれたものらしい。明応のころには名前だけが残っていたと考えられないではないが、そこにはなお相当な商業地域を構成していたように思われなければならない」ともしている。『善法寺寺領書上』(『善法寺分年貢注文』)をそのまま読めば、明応六年当時善宝寺はその支配とみられる商業地域の作人から年貢収益を得ていたことが推定できる。[三浦(1993); 鎌倉市(1979a)].

その後は、鶴岡八幡宮別当坊海光院法印俊朝かいこういんほうういんしゅんちやうの明応九年(1500)五月『俊朝覚書』[鎌倉市(1979b)]に抑社頭十余年無造営、絶破壊言語、(中略)神宮寺鐘楼堂之造営、

「そもそも社頭十余年造営なく、破壊言語に絶す、(中略)神宮寺鐘楼堂これ造営す」とあり、『快元僧都記』には天文元年(1532)から始まる後北条氏による鶴岡八幡宮再建で、「鎌倉番匠」「扇谷今小路番匠(主計助)」「当社之大工」など大工のほか、「町人」「町之時宗」等の名が書かれている。佐藤(1991)は『快元僧都記』の検討の中で「すなわち、後北条氏の造営工事と同時的にして一体的に繰り広げられた諸種造営主体の存在は、勧進行為、『万人講』『町人発起』という事態に象徴された。それは、例えば、『仮殿礎少、自宵、町之時宗喚寄、以太鼓時刻相定而、夜中ニ被敷了』という特定の『町之時宗』の人々のみならず、その七度行路の際の『近年磨滅、往復之者回路ヲ通之处、町人発起剃頭、此四ヶ年間如形仕』という一般的な『町人』達に支えられていたのであった。またそれは、その背後に八足門の本願人道円の集めた勧進銭(五〇貫文)が、長谷河某をへて『町へ運下』されるような『町』の存在と不可分の関係にあったのである」と、同宮や「七度行路(段葛か)」における作事・普請について鎌倉土着の「町人」の存在に着目して「鎌倉の『町』『町人』の存在は、政治的にも経済的にも鶴岡八幡宮の再生産構造と深く結び付いていた」とし、このほか後北条氏と同宮とを繋ぐ役目の者として、在地の有力者と思える「後藤善右衛門尉」がいたことなどを指摘している。

後北条氏による同宮再建は、「奈良番匠」「京番匠」ら西国の職人以外に鎌倉の旧勢力としての「後藤善右衛門尉」や、「町人」「町之時宗」など在地の人々に支えられていたことが推定できる。それゆえ、室町時代後期以降後北条氏支配以前の鎌倉では、為政者の存否にかかわらず鶴岡八幡宮を保護する基盤のみは連綿として存続していたのかも知れない。この点からみても『善法寺寺領書上』(『善法寺分年貢注文』)は、明応六年に町の衰退が極まっていたとする根拠にはなり得ないと考える。

§4. まとめ

本稿では、明応年間鎌倉に襲来したとされる津波の史料について、「若宮大路」や「大仏殿」のほかこの時期の鎌倉の町(町屋)の状況から検討し、下記のとおり結論を得た。

- ① 鎌倉に津波が襲来したと推定できるのは、当時の史料からすると『鎌倉大日記』明応四年の記事であって、同七年の史料ではないようである。また、この記事の読み方からすると、山本(1989)が示した「水勢大仏殿破堂舎屋」を地震による倒壊とするこ

とには無理があるように思われる。

- ② 『鎌倉大日記』に書かれた「千度檀」は若宮大路か段葛で、津波がそこに到ったとしても『善宝寺寺地図』(図2)や若宮大路での埋蔵文化財調査の成果から、遡上高は同大路における各調査地点の中世遺構面の高さ(4 m~6 m)程度であったと考えられる。
- ③ 若宮大路及びその一帯で実施された埋蔵文化財調査により、同大路では一ノ鳥居以南にも中世遺構が、また、鎌倉中心部や由比ガ浜の海浜部からも戦国時代に至る遺構が確認されている。このことからすると、下馬四ツ角の南から海岸線までは道がなく、同大路周辺が湿地か草地であって自然災害を受けやすい状態にあったとした、山本(1989)の推定は成立し得ない。
- ④ 「鎌倉大仏」とその覆堂としての「大仏殿」は造営に際して幕府の関与が想定できるものの、何時、誰が、何の目的で造らせ、どのような変遷を辿ったかは不明な、謎が多い遺産である。そして、『梅花無尽蔵』や『太平記』『鎌倉九代記後記』等からすると、中世における「大仏殿」の存在を伝えた記録は建武二年(1335)か正平二十四年・応安二年(1369)までであったようである。
- ⑤ 「大仏殿」の存在は発掘調査によって明らかになった。ところが、『性公大徳譜』の「大仏別当」、文永五年『日蓮書状』に見える「大仏殿長老」「大仏殿別当御房」の記、義堂の詩の「相之大仏寺」や『三嶋神社文書』応永四年の「鎌倉大仏寺」などの語からすると、中世において「大仏寺」や「大仏殿」は寺院の名称であったようである。そこで、「大仏殿別当」であった忍性の存在から、極楽寺との関係も窺える。このことが「大仏殿」の境内と結びつかは未詳だが、義堂の詩中「寺瀬^{シテ}海岸」からすれば、「大仏殿」境内は広さがあって海岸近くに面していたことは想像できる。

明応四年鎌倉に津波が襲来したとしても、海岸まで広がっていたと思える「大仏殿」境内のどの位置の建物に達したかは不明である。そのうえ、室町時代においてこの年以前に「大仏殿」がなかったことはほぼ確実である。『鎌倉大日記』の「八月十五日大地震洪水……」については、「千度檀」の解釈も含めると遡上高及び浸水域は不明なので、金子(2012)がいう「鎌倉の沖積低地の大半は被災した」ような津波ではなかった可能性が考えられる。
- ⑥ 明応六年七月二十五日『善法寺寺領書上』(『善法寺分年貢注文』)の内容からすると、室町時代の後半から後北条氏支配以前にかけての時期の鎌倉は政権都市としては衰亡したものの、為政者の存否にかかわらず鶴岡八幡宮を保護する基盤は存続していたとみることができる。

為政者のいなくなった鎌倉は、政治都市としては衰退したようである。ただ、「町(町屋)」としての機能は保たれていたと思われるので、金子(2012)がいう「明応四年津波で都市が破壊され」、「鎌倉の衰微が明応六年までに極まったことを示す象徴的な出来事」と推定するのはかなり難しいことと考えたい。

鎌倉における「歴史地震」の研究は始まったばかりである。現在、明応年間の「地震」が脚光を浴びており、地震に関する史料の再検討がこれから重要な課題となるだろう。同四年当地に地震と津波があったことは想像できる。ただ、はたしてこれは巨大津波であったのだろうか。『鎌倉大日記』等の年代記はいうまでもなく、古記録や古文書類は慎重に取り扱われるべきである。今後は明応年間の津波について改めて検証されることを、希望する次第である。

謝辞

このたびは、拙稿を纏めるにあたり蟹江康光氏、玉林美男氏からご指導を、また、光明寺様より写真掲載のご許可を賜りました。殊に編集出版委員の行谷佑一氏より多くの貴重なご助言を賜ったことで内容は大幅に改善されました。この場をお借りして、篤く御礼申し上げます。

対象地震： 1495・1498年明応地震。

文献

- 市木武雄, 1993, 梅花無尽蔵注釈, 1, 続群書類従完成会, 492-499.
- 鎌倉市, 1979a, 鎌倉市史, 総説編, 吉川弘文館, 628 pp.
- 鎌倉市, 1979b, 鎌倉市史, 史料編第一, 吉川弘文館, 第975号文書, 65-66.
- 鎌倉市, 2001, 鎌倉大仏周辺発掘調査報告書Ⅰ, 46 pp.
- 鎌倉市, 2002, 鎌倉大仏周辺発掘調査報告書Ⅱ, 77 pp.
- 鎌倉市教育委員会, 1986, 鎌倉市文化財総合目録, ——書跡・絵画・彫刻・工芸篇——, 750 pp.
- 鎌倉市教育委員会, 2000, 国指定史跡若宮大路遺跡発掘調査報告書Ⅹ, 公共下水道(汚水)築造工事(中間バイパス幹線埋設)に伴う立会い調査, 18 pp.
- 鎌倉市教育委員会, 2006, 史跡若宮大路保存管理計画策定報告書, 77 pp.
- 神奈川県, 1979, 神奈川県史, 資料編3, 古代・中世(3下), 第6410号文書, 162-163.
- 神奈川県立金沢文庫, 2002, 鎌倉大仏建立七百五

- 十年記念特別展 鎌倉大仏と阿弥陀信仰, 95 pp.
- 金子浩之, 2012, 宇佐美遺跡検出の津波堆積物と明応四年地震・津波の再評価, 伊東の今・昔——伊東市史研究 10——, 伊東市教育委員会, 102-124.
- 国文学研究資料館, 2014, 吾妻鏡データベース.
<http://base1.nijl.ac.jp/~anthologyfulltext/>
- 黒川真道(編), 1914, 国史叢書, 鎌倉公方九代記・鎌倉九代後記, 国史研究会, 445-504.
- 高德院, 1961, 高德院国宝銅造阿弥陀如来坐像修理工事報告書, 205 pp.
- 身延久遠寺, 1976, 昭和定本 日蓮聖人遺文, 1, 第52・54・56・58・63号文書, 426-437.
- 三浦勝男, 1993, 善宝寺寺地図, 鎌倉国宝館図録 16, 鎌倉の古絵図Ⅱ, 鎌倉国宝館, 5-6.
- 浪川幹夫, 2013, 中世鎌倉の烈震と復興——鎌倉時代末期から戦国時代の地震災害と復興の姿——, 鎌倉 114, 鎌倉文化研究会, 16-35.
- 齋木秀夫, 1994, いわゆる「浜地」の成立と範囲, 中世都市鎌倉を掘る, 日本エディタースクール出版部, 93-112.
- 佐竹昭広(編), 1990, 中世日記紀行集, 新日本古典文学大系 51, 東関紀行, 岩波書店, 536 pp.
- 佐藤博信, 1991, 『快元僧都記』の世界像——戦国期の都市鎌倉の理解のために——, 日本歴史, 532, 吉川弘文館, 14-32.
- 清水茂夫・服部治則(編), 1967, 戦国史料叢書 第2期 13 武田史料集, 新人物往来社, 358 pp.
- 震災予防調査会, 1904, 震災予防調査会報告, 第46号, 甲, 606 pp.
- 白井永二, 1963, 段葛考, 鎌倉9, 鎌倉文化研究会, 1-7.
- 白石克(編), 2003, 新編鎌倉志, 貞享二刊, 汲古書院, 178-181.
- 高橋秀榮, 1996, 中世の鎌倉大仏に関する歴史年表, 鎌倉大仏史研究, 創刊号, 高德院, 47-59.
- 田中敏子, 1973, 忍性菩薩行記(性公大徳譜)について, 鎌倉 21, 鎌倉文化研究会, 40-53.
- 千葉県安房郡教育会, 1926, 千葉懸安房郡誌, 1208 pp.
- 東京大学史料編纂所, 謄写本, 和長卿記, 東叡山文庫本.
- 都司嘉宣, 1980, 明応地震・津波の史料状況について, 海洋科学, 12, 504-526.
- 宇佐美龍夫, 1998, 日本の歴史地震史料, 拾遺, 日本電気協会, 512 pp.
- 鷲尾順敬(編), 1936, 西源院本 太平記, 刀江書院, 347-350.
- 矢田俊文, 2012, 中世後期の地震と年代記, 東北中世史研究会会報, 22, 東北中世史研究会, 1-8.
http://dSPACE.lib.niigata-u.ac.jp/dSPACE/bitstream/10191/23982/1/22_1-8.pdf
- 山本武夫, 1989, 明応七年(一四九八)の海洋地震——伊豆以東における諸状況, 古地震 続 実像と虚像, 東京大学出版会, 343-364.
- 山梨県, 2001, 山梨県史, 資料編6, 中世3上, 勝山記, 195-225.
- 陽明文庫, 1991, 後法興院記三, 記録文書8, 思文閣出版, 520 pp.
- 由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査団, 1997, 神奈川県鎌倉市由比ガ浜中世集団墓地遺跡発掘調査報告書——由比ガ浜四丁目 1136 番地点(KKR 鎌倉若宮荘)——, 第2分冊・中世編, 523 pp.
- 由比ガ浜南遺跡発掘調査団, 2002, 神奈川県鎌倉市由比ガ浜南遺跡, 第1分冊・本文編, 425 pp.
- 続群書類従完成会, 1933, 続群書類従, 補遺3, 御湯殿の上の日記(二), 517 pp.
- 続群書類従完成会, 1983, 群書類従 25, 雑部, 快元僧都記, 526-577.
- 続群書類従完成会, 1988, 続群書類従9上, 日蓮聖人註画讃, 卷第二, 119-145.
- 続群書類従完成会, 1989, 続群書類従, 29 輯上, 雑部, 神明鏡, 95-203.
- 続群書類従完成会, 2000, 実隆公記, 卷三之下, 395 pp.
- 増補史料大成刊行会, 1963, 増補史料大成 43, 親長卿記 三, 臨川書店, 332 pp.
- 増補史料大成刊行会, 1979, 増補続史料大成 51, 鎌倉年代記・武家年代記・鎌倉大日記, 臨川書店, 187-260.



図1 現在の鎌倉周辺地図(基図は国土地理院による地理院地図を利用した)

Fig. 1 A present map around Kamakura. GSI map provided by Geospatial Information Authority of Japan is used.

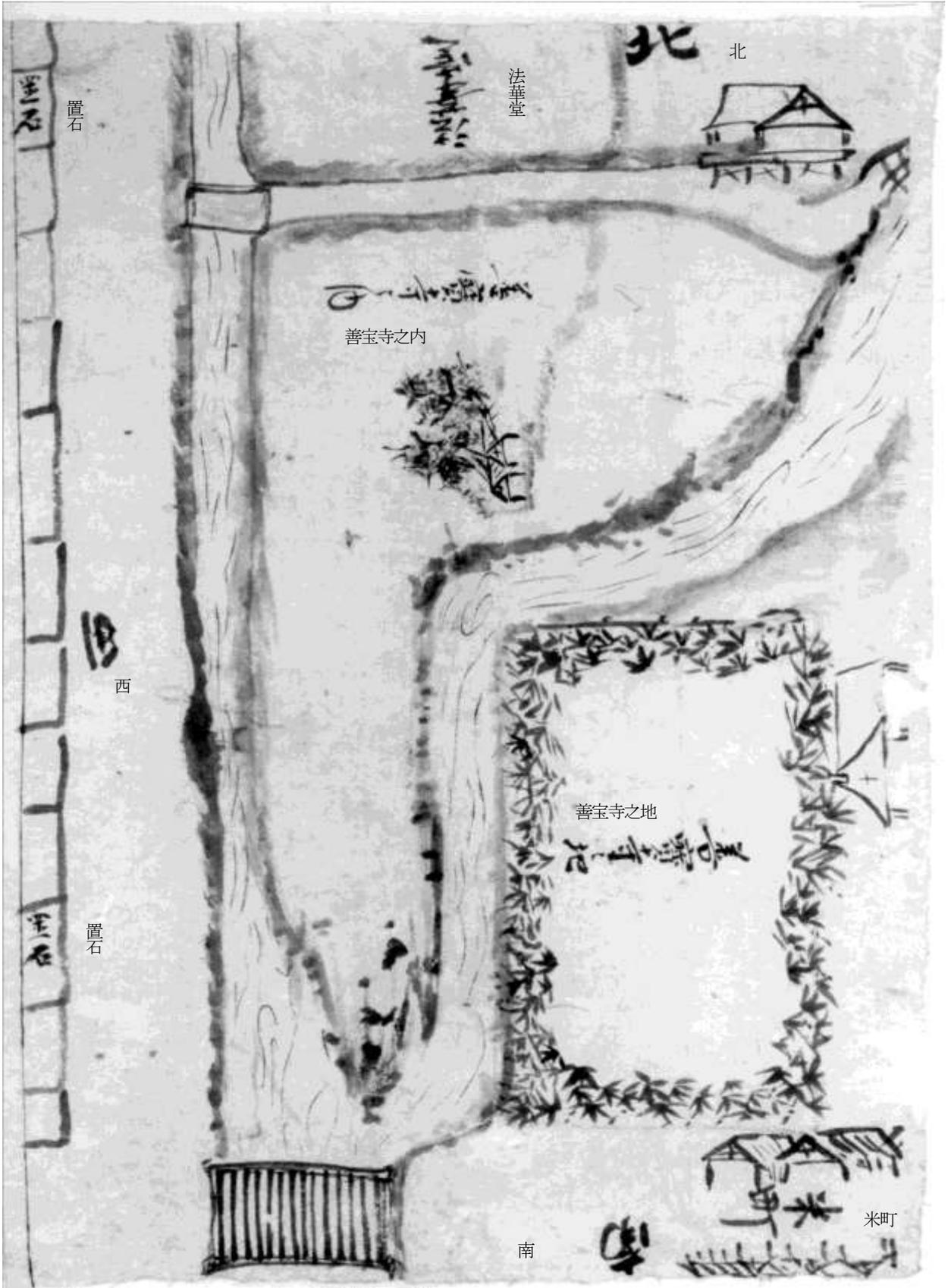


図2 明応期の善宝寺寺地図(光明寺蔵資料から転載)

Fig. 2 An old map in Meio period around Zenpoji temple. Reprinted from Komyoji temple.

